

集中豪雨とは

集中豪雨とは、狭い範囲に比較的短時間に大量の雨が降る現象です。愛知県では、平成12(2000)年の東海豪雨や平成20(2008)年8月末豪雨など、何度も被害にあっています。

集中豪雨は梅雨の終わりごろや台風シーズンに発生しやすい、河川の氾濫やがけ崩れなどで大きな被害が出ることがあるので、十分な注意が必要です。

1時間の雨の量と降り方

10～20mm	ザーザーと降り、雨の音で話し声がよく聞き取れない。
20～30mm	どしゃ降りや側溝や下水、小さな川があふれ、小規模のがけ崩れが始まる。
30～50mm	バケツをひっくり返したように降り、山崩れ・がけ崩れが起きやすくなる。都市では下水管から雨水があふれる。
50～80mm	滝のように降り、都市部では地下室や地下街に雨水が流れ込む場合がある。土石流が起きやすくなる。
80mm以上	息苦しくなるような圧迫感がある。雨による大規模な災害の発生するおそれが高く、厳重な警戒が必要となる。

警報と注意報

気象庁は、大雨などによって災害が起きるおそれのある時に「注意報」を、重大な災害が起きるおそれのある時に「警報」を発表します。

さらに、平成25(2013)年8月から『特別警報』の運用が開始されました。

この『特別警報』は、警報により重大な災害への警報を呼びかけたものの、災害発生の危険性が十分に伝わらず、迅速な避難行動に結びつかない事例が発生したことから設けられたものです。



線状降水帯とは

次々と発生する発達した雨雲(積乱雲)が列をなした、組織化した積乱雲群によって、数時間にわたってほぼ同じ場所を通過または停滞することで作り出される、線状に伸びる長さ50～300km程度、幅20～50km程度の強い降水をともしう雨域を線状降水帯といいます。

毎年のように線状降水帯による顕著な大雨が発生し、数多くの甚大な災害が生じています。

ただ、線状降水帯は、まだ発生条件が未解明の部分が多いことから、現在でも正確な予測は難しいとされています。

しかしながら、線状降水帯が発生すると、大雨災害発生の危険度が急激に高まることがあるため、令和3(2021)年6月から、気象庁は、線状降水帯が発生したことをいち早く知らせる「顕著な大雨に関する気象情報」を提供しております。

今後、段階的に対象地域を狭め、情報の発表を早めていくなど、防災気象情報の高度化に向けた取組を行っています。

市町村が発令する避難情報や大雨警報、キキクル(危険度分布)等の防災気象情報と併せて活用し、自ら避難の判断をすることが重要です。

警報・注意報の種類

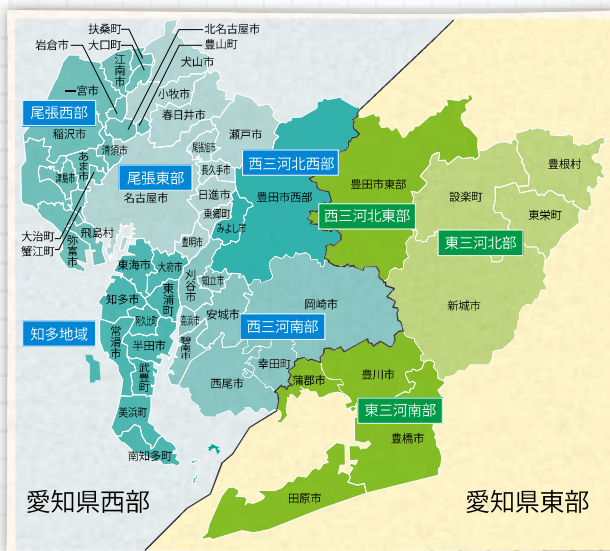
特別警報	大雨・大雪・暴風・暴風雪・波浪・高潮
警報	大雨・洪水・大雪・暴風・暴風雪・波浪・高潮
注意報	大雨・洪水・大雪・強風・風雪・波浪・高潮・濃霧・雷・乾燥・なだれ・霜・低温注意報など

大雨警報は、「大雨警報(土砂災害)」と「大雨警報(浸水害)」として発表されます(土砂災害と浸水害が同時に出されることもあります)。

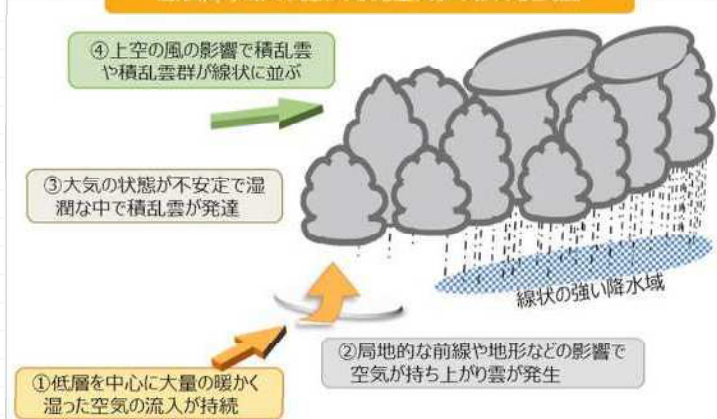
警報・注意報の発表区域

警報・注意報は市町村ごとに発表されます。

なお、テレビやラジオでは、重要な内容を簡潔かつ効果的に伝えられるように、市町村をまとめた地域の名称により、警戒を要する地域をお知らせする場合があります。



線状降水帯の代表的な発生メカニズムの模式図



図は気象庁ホームページより

(https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/bosai/kishojoho_senjokousuitai.html)